

座 談 会

大学の機能強化と地方創生

浜松市、浜松信用金庫、浜松医科大学の座談会が実現しました。

テーマは、「大学の機能強化と地方創生」

これからの本学の取り組みについて、期待や要望をお伺いしました。

鈴木 康友

浜松市長

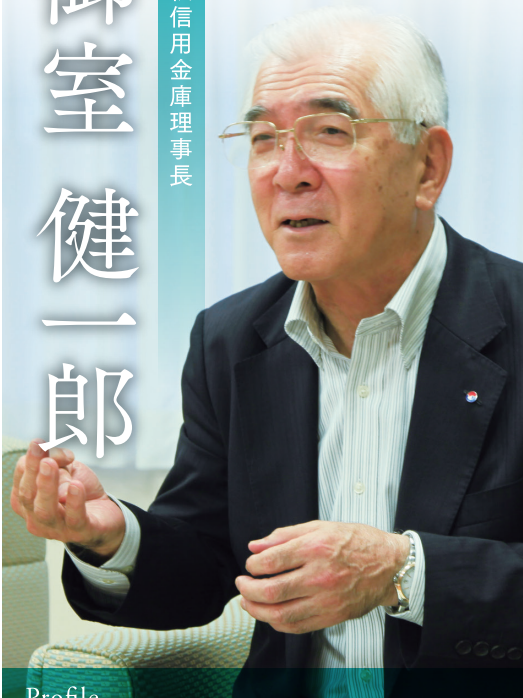


Profile

慶應義塾大学法学部を卒業。1980年4月松下政経塾に入塾(第1期生)。2000年6月に衆議院議員に初当選(2期)。2007年5月から現職(現在3期目)。三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)会長。2011年12月から指定都市市長会副会長。

御室 健一郎

浜松信用金庫理事長

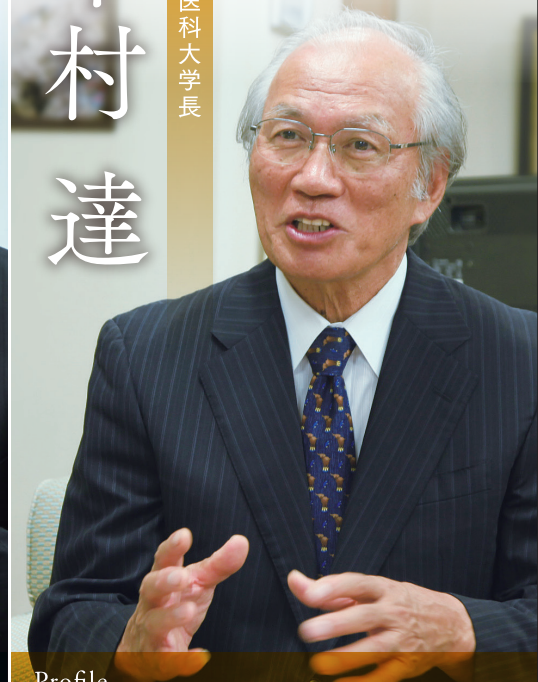


Profile

成蹊大学政治経済学部を卒業。1968年4月浜松信用金庫入庫。1986年5月支店長、本店営業部長、理事、専務理事を経て、2005年6月から現職。浜松商工会議所会頭。浜松市行財政改革推進審議会会長。2012年11月黄綬褒章を受章。

中村 達

浜松医科大学長



Profile

慶應義塾大学医学部を卒業。1977年4月浜松医科大学附属病院助手。同大講師、助教授、教授、病院長を経て、2010年4月から現職。専門は消化器、肝胆膵(肝臓、胆道、すい臓)の外科。

司会 私は、司会を担当します浜松医科大学、山本です。よろしくお願いします。

今日は、大学の機能強化と地方創生をテーマにして皆さんのご意見を伺いたいと思います。

最初に、浜松医科大学の機能強化に向けた取り組みについて、中村学長から説明をお願いします。

光で「視る、診る、看る」を極め、
日本・世界の医療を牽引する。
光医学分野で日本・世界を
リードする大学へ

中村 平成25年から3年間を、大学改革加速期間と定義づけられまして、国立大学改革プランをつくることとなっています。

その中で、今までの浜松医科大学のミッションを再定義しました。新たに加えたことは、光技術の医学応用を研究ばかりでなく、それによりイノベーション創出を目指し、また、日本のものづくりの基盤である製造業が盛んな地域特性を踏まえ、産業保健、産業看護の発展・向上を担うことなどを掲げました。

また、第3期に向けて、光医学をどういう形で教育し研究していくかということが、長年の伝統としてのテーマであり、無侵襲で、光トモグラフィーという光で乳房とか甲状腺の腫瘍を診断する、さらにトモグラフィーの機器をできるだけ実用化しようという計画を立てて申請しました。これが文部科学省に

認められて、今年日本で指折りの研究者を招きました。

以前から、光で何かをしようという大学院生、若手研究者等を募集し、教育を行っています。すでに大勢の人たちが、大学及び会社等で活躍しています。さらに進めて医学部生にもそれを取り入れようと考えています。

研究だけでなく、できるだけ実用化、事業化しようと、そのためには、産学官と金融機関まで入れて、連携が必要であろうと考えています。抜本的機能強化、光先端医学教育研究センターが、すなわち地方創生に役立つ内容であると文部科学省も認めてくれます。

さらに、がんと精神と、血管疾患の治療もテーマに掲げて取り組んでいこうと考えています。

司会 中村学長、ありがとうございます。

本学の機能強化は、もともと地域特性とこれまでの実績を活かした光医学をさらに発展させるために、医学教育研究拠点を形成するというのですが、このような取り組みに対する期待や注文ということを
お伺いしたいと思います。

産業政策
6つの成長分野

鈴木 注文というよりも大変期待をしています。

浜松は産業力でここまで発展してきたまちです。今、全国で政令指定都市が20か所ありますが、15か所は県庁所在地です。県庁所在地は、人、物、お金が最初から集まっているため、発展が約束され、非常に有利です。県庁のない都市は5か所ありますが、そのうちの3か所、川崎、堺、相模原は、東京、大阪などの巨大都市の近郊都市で、これも非常に有利な条件が整っています。県庁もない、近郊に大都市もないという中で、自力で発展して政令指定都市になったのは北九州と浜松です。

両者に共通しているのは産業都市だということです。ご承知のように北九州の場合は、明治になってから、政府の富国強兵、殖産興業の大方針のもと、鉄を生産しなくてはいけないということで官営の八幡製鉄所ができて、鉄のまちとして発展してきました。しかし、浜松は、スズキ、ヤマハ、ホンダ、カワイ、浜松ホトニクスも、町工場からスタートして、それが世界的企業になって、それらに先導されるように、分厚い産業構造ができて都市が発展してきました。産業力で自立的な発展をしてきたまちなので、



写真右：司会の本学学長特別補佐（広報・社会貢献担当） 山本清二

将来を考えたときに、浜松から産業が消えたとなると本当に背筋がぞっとするような状況になるわけです。

これから、地方創生、地域の特性を活かして地域を活性化するということが、やはり浜松の場合、一丁目一番地は産業政策だと考えています。今までは、繊維があり、楽器があり、輸送機器がありと、うまく浜松の産業というのは成り立ってきましたが、いつまでも車やオートバイだけに頼ってはいただけません。新しい産業の柱をつくっていく必要があります。そこで、今、市では6分野を成長分野として位置づけています。1つは次世代輸送用機器。これは、今の輸送機器産業の延長線上にあるもので、ガソリンとエンジンではなく、電気とモーターで走る車のイメージです。それから、浜松ホトニクスを中心とした光の

分野。次に医工連携、いわゆる、メディカルでも特に医療機器の分野ですね。また、エネルギーの分野と新農業。浜松は農業が盛んですから、6次産業化によって農業も革新させて、1つの産業として自立させようとしています。最後はデジタルコンテンツ。車は電子機器の塊なので、組み込みソフトというデジタルコンテンツが核になるわけです。

今後、医工連携は、光と深く関わっていきまして、光技術というのは、イコール、センサー技術になります。これはこれからの先端医療に欠かすことのできないもので、「産学官金」の連携の中で進めていかなければということです。まさに歩む方向というのは一緒だと思います。

具体的な取り組みは、浜松ホトニクスと浜松医科大学が中核となって進めていただき、環境整備や国との関わりというのは行政の仕事として我々が一生懸命やっていきます。ぜひ、期待をしておりますのでよろしくお願いします。

司会 期待しているという、力強いお言葉、ありがとうございます。

連携がキーワード

御室 浜松医科大学は、昭和49年に開学されて以来、地域医療に大きく貢献されてきました。今後は、地域医療、教育の枠を超えて、地域産業をどう元気にしていくのかという視点も重要な課題になっていくと考えます。我々金融機関としても地域の活性化にどう貢献していくのかが今強く問われていますが、



一つには、行政とか大学、地域金融機関がしっかり連携することがキーワードになると思います。それぞれが、ばらばらに独自でやっても非常に効率が悪いです。いかに連携して一緒にやっていくのかということが私は一番大事なことだと思いますし、特に大学と、民間との共同研究の部分にはまだ少し弱い感じを受けています。すでに実績件数は少しずつ伸びていますが、産業界としても、より一層地域と大学の結びつきを強化していければ、新たな展開が広がる可能性があるはずです。

先ほど市長からお話がありましたように、光を使った新しい産業創出、これは非常に重要なことですし、ぜひ実現していきたい。もう一方では、例えば、介護とか、あるいは診療をするときに何か必要な、事務作業の面からこの地域で、大学へ技術やシステムを供給できる仕組みができないのか。浜松ホトニクスを中心とした最先端の技術だけではなくて、介護ロボット、ロボットはかなり先端になりますけど、もう少しメカニク的な介護補助機器、こういうものをこの地域の産業として育成できればと思っています。

いずれにしても、自動車など、今まで浜松で主力になっていた産業というのは、マーケットを求めて海外への





進出が加速していて、本社機能は残っていても、雇用の受け皿は減少する懸念があります。そういう地域の変化に対して、雇いをどういう形でこの地域に生み出していくのか、行政、それから大学、我々のような民間は共通の問題意識を持つべきではないでしょうか。

司会 常々、御室理事長は、いろいろな分野の人が同じ目標に向かって連携をするということの重要性をよくお話しされていて、産学官金の中で、1つの目標に向かって力を合わせるということは確かに重要だと思います。

御室 それは、すごく重要なことで、皆さんがそれぞれの分野で一生懸命力を発揮して、行き着く先は、やはり地域のため、住民の皆さんのため、しっかり集中して進んでいくべきだと思っています。

司会 そういう意味だと、キーワードは地方創生に向けてどういう取り組みをするかということになるかと思いますが、市の行政の立場から、それから産業界の立場、金融界の立場から、地方創生について少しお話しただいて、それに対して中村学長から、どういう形で、大学と

しても協力、取り組みができるのかということをお伺いしたいと思います。

**産業力強化をして、雇用を生み出す。
県を越えて広域連携**

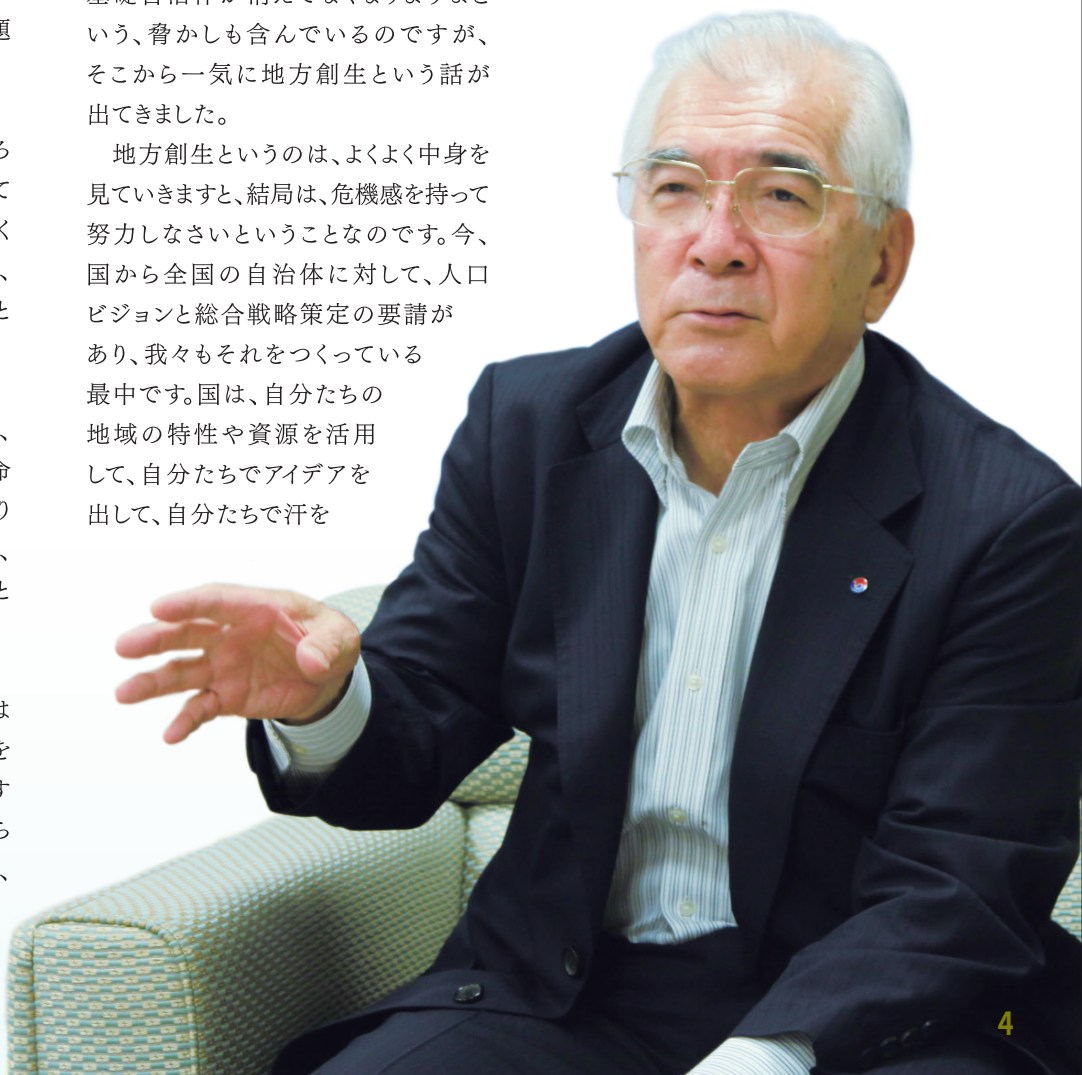
鈴木 人口減少、これは避けられないわけですし、これからの何十年かは人口が減り続けていくという中でいろいろな取り組みをしていかなければと思います。

今まで、何となくこれから人口が減っていきますよという漠然とした話だったものが、昨年の増田レポートによって、特に地方自治体について衝撃的な影響が出るとされました。多くの小さな自治体は、人口減少によって自治体として存続し得ない、消滅可能性都市などと言われています。896、約半分の基礎自治体が消えてなくなりますよという、脅かしも含んでいるのですが、そこから一気に地方創生という話が出てきました。

地方創生というのは、よくよく中身を見ていきますと、結局は、危機感を持って努力しなさいということなのです。今、国から全国の自治体に対して、人口ビジョンと総合戦略策定の要請があり、我々もそれをつくっている最中です。国は、自分たちの地域の特性や資源を活用して、自分たちでアイデアを出して、自分たちで汗を

かいて頑張りたいと言っています。これが地方創生ですね。

私は、子育て支援とか、総合戦略とかいろいろなことがありますけれども、やはり、まず産業力強化だと考えています。つまり、雇用を生み出さない限りは何を言っても始まらないわけです。結局、働きの口がなければどんどん人が出ていく。出ていけばまた活力が失われて、また産業が衰退していくという悪循環になっていきます。浜松はものづくりのメッカとして第2次産業を中心に発展してきましたけれども、これからはものづくりだけでなく、多角的に、第1次産業やサービス産業も含めて産業力強化をしていかないと浜松の将来は決して安心してはいられません。そういう中であって浜松医科大学は、



本当に中核中の中核だと思います。もちろん第一義的には地域医療を守っていただくという、まさに人材を輩出していただくということですが、研究はもちろん、具体的なものをつくり出していくという部分にも大いに期待をしています。

また、地方創生は、単独の、個別の自治体が自分たちだけでやっていくというのも限界があります。例えば、愛知県東部の東三河地域、静岡県西部の遠州地域及び長野県南部の南信州地域は、生活圏、文化圏、あるいは産業面でも、非常に関わりが深く、今、三遠南信という取り組みを行っています。

浜松には静岡大学もありますけれども、少し県境を越えると豊橋技術科学大学というとてもいい大学があります。ぜひ広域連携をやっていきたいと思っ

ていますので、浜松医科大学の皆さんにも、県を少し飛び越えていろいろな取り組みをお願いします。

司会 地方創生の中で、産業力を高めてこの地域を活性化するといったときに、安全で安心して暮らせる浜松市でないといけない。健康長寿のまちではありますけど、そういう意味で浜松医科大学が果たせる役割というのはありますか。

静岡県の医療体制の充実

中村 浜松市は日本一健康長寿ですが、静岡県東部の医療はまだ不十分です。

それで、本学は、東京、神奈川からの入学者はほとんど帰ってしまうものですから、静岡県出身者を多く受け入れることを考えました。平成23年ごろから120名の定員に対して約60%の静岡県出身者が入学しています。静岡県東部の高校へも大学説明を実施しています。これから静岡県に定着する医師が、毎年80名ぐらい出てくると思います。

しかし、東部には、医師がキャリアアップできる大きな病院が、少ないのも医師定着率の低い要因となっています。

御室 なるほど。

中村 それから、浜松で大災害が起こったときに病院が機能しなくなったとき

どうするか、業務の改善・効率化も含めて本学職員が、地元企業と共同で材料部業務の作業を支援するシステムの開発を進めてきました。地元企業では、運用面での試験を重ね、医療機関への販売を目指しています。

鈴木 すばらしい。

中村 病院の中で、大学の中で困っていることを、企業の人と常にもっと寄り合って、アイデアがないか、ニーズはないか、シーズはないかというよりも、コミュニケーションをもっと密にしていけば、新たな協力、連携体制ができてくるのではないかと思います。こつこつと、浜松市、そして静岡県に貢献していければと思っています。

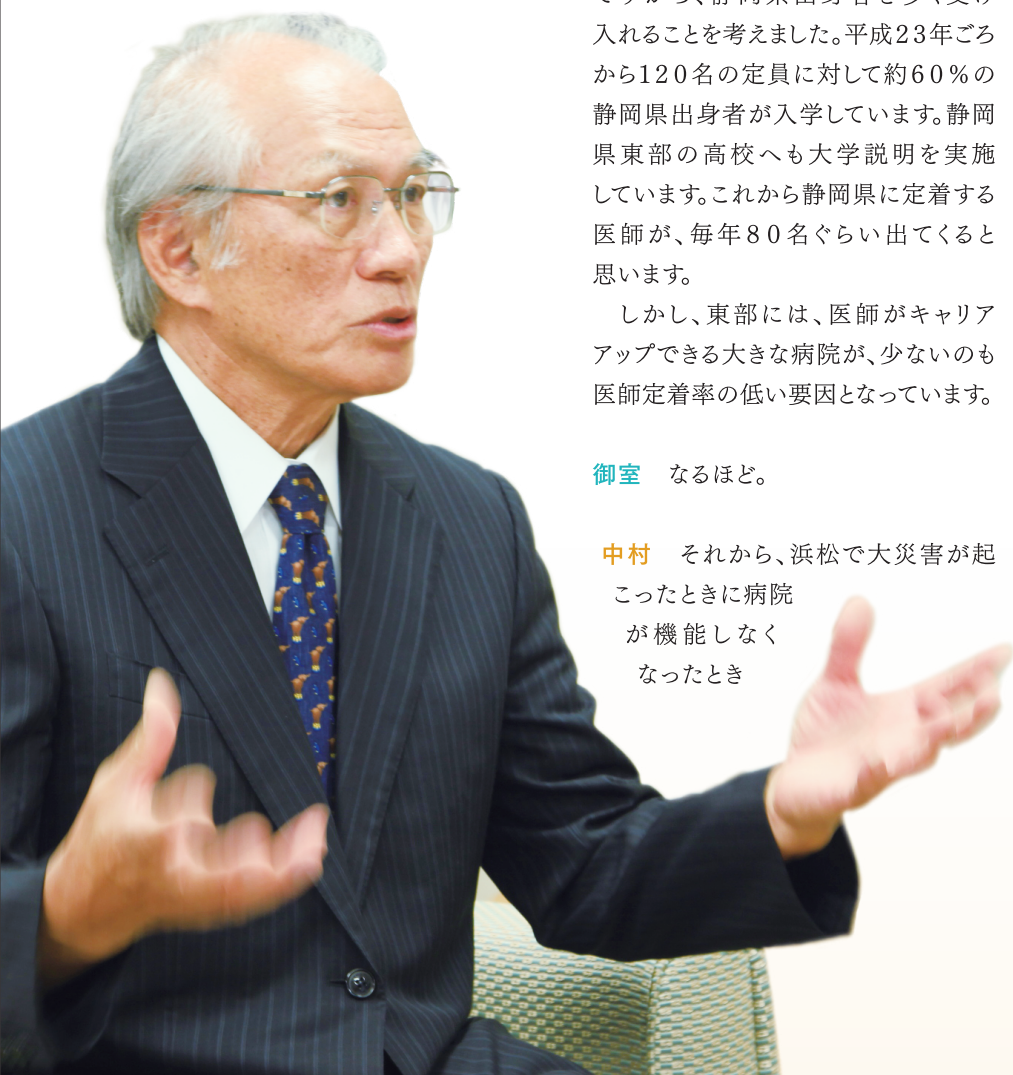
司会 本学の学生とか、あるいは教職員に対して、地域の皆さんはどういう人材像を期待しておられますか。

御室 学生さんは、一生懸命勉強をしてください。よく健康のために講演をしてくださいますが、よりきめ細かく実施していただけると良いですね。例えば企業の中に入って、こういう健康法や病気予防法がありますよといった健康教室の開催など、工夫の余地はいっぱいあるかと思います。

司会 産業イノベーションという観点から、何かご意見はございますか。

きめ細かく、地域に情報発信 ローテクな技術の開発も重要

御室 産業イノベーションというと、今、浜松ホトニクスが目立って、大学との研究を強力に実施していますが、もう少し広がりのある、ローテクでも対応できる医療機械、器具をつくる仕組みが何かつけれないかなと思っています。中小企業でも参画しやすい環境を



つくって浜松医科大学での研究に必要な
となるちょっとした器具とか、あるいは、
医師なり患者さんが移動するための
手段などそういうニーズを、地域へ発信
をしていただければ、協力するところが
いっぱい出てくると思います。

司会 今、御室理事長がお話しされた
関係で言うと、「HAMING」
(HAMamatsu Medical INnovative
Group)という協同組合があります。
いろいろなものづくりの技術を使って、
新しい医療機器、鋼製小物を、うまく
生産性を高めています。

浜松の財産「浜松医科大学」 いい人材を育てる。

鈴木 行政の立場になると医療はとて
も大事な分野です。浜松は非常に医療
体制がしっかりしています。

先人の皆さんに感謝しているのは、
ここに医大をつくっていただいたという
こと、浜松医科大学があるというのは、
これは何物にもかえがたい大きなこと
です。また、医師会もかなり開明的と
いうか、いろいろな取り組みをしている
ので、そういう点では非常に医療に
恵まれている地域です。ぜひ、今後も
浜松の財産として継承していきたいと
考えていますし、そこを担う人材をどこが
輩出してくるかといったら間違いなく
浜松医科大学だと思います。

中村 大学側から言いますと、浜松医科
大学が医師国家試験合格率日本一に
なったことは、自慢できることだと思っ
ています。

それで、浜松のどこの病院に行っ
ても、本当に大変なときはいつでも駆け
込み寺的に受け入れられるような技術
を持っていればいいなと思っています。

司会 こういう座談会の取り組みは、
今回初めてです。座談会形式、あるいは



ほかの取り組みも含めて、感想とか何か、
ご提案がございましたらお願いします。

鈴木 新薬の治験については。

中村 臨床研究管理センターがあります。
かなり前から、第Ⅰ相、第Ⅱ相と臨床
試験を行っています。浜松市の基幹病
院で「とおとうみ臨床試験ネットワーク」
を形成して臨床研究の推進に取り組ん
でいます。厚生労働省も認めているところ
です。

御室 病院の経営も見るとすばらしい
ですね。外来の患者数の伸びとか、それ
から1人当たりの単価とか、付加価値
がどんどん上がっています。病院経営
が収益偏重になることは論外ですが、
それでも健全経営を志向することは
重要です。国からの交付金が減っていく
わけですから、やはり自分で稼がないと
いけない時代になっていますね。

中村 大学経営って、お金もうけでは
なくて、やはりいい人材を育てて、いい
教授を選考することが第一です。例え
ば、浜松にいない脊椎の専門家を採用
しましたところ、周りの病院でも、脊椎を
勉強したいという医師も増えてくるし、
患者も集まってくる、そういうことがこれ
からの重要な仕事だろうなと思いますね。
他にないものを、すぐできる人を呼ぶ
ことですね。

司会 今日、浜松医科大学に対して
「期待していただいているな」というの
がすごく伝わって、ありがとうございます。
しました。

今後ともよろしくお願いします。

ちょっと寄り道

Q 健康長寿のひけつは？

御室 浜松の健康長寿日本一は、ギョーザ
とお茶と共稼ぎがすごくいいと聞きました
が、それって本当ですか。

鈴木 喫煙率が低いとか、高齢者の就業
率が高いとか、いろいろ言われていますね。

中村 そういうこともあります。医者が
多いことによって衛生知識が際立っている
のではと思います。

司会 救急体制も早くから整備されていま
すね。

鈴木 あと、ストレスがないというのがいい。
浜松は暮らしやすいですよ。長く東京に住ん
でいて、決して悪いところではなく通勤
ラッシュもなかったのですが、東京に住んで
生活していくだけでストレスをものすごく感じ
ます。人の多さとかね。浜松はそういうところ
がないですよ。

御室 適度の田舎というのがいいのかな。

